地域研究

地域文化シリーズ 27

この通りの名は

清水希容子
一般財団法人日本経済研究所　地域未来研究センター　研究主幹

東京駿河台にある当研究所前は、「駿河台道灌道」といい、太田道灌ゆかりの神社があり、春は遅咲きの葉桜のトンネルになる。

ビジネス街にある細く短い道に、行き交う人たちの日常がある。急ぎ足で取引先に向かう人、コンビニで用事をすませる人、お昼になると女性グループが道の角で立ちどまって、どちらにランチに行こうか相談している。

場所を説明するとき、最初は「駿河台３丁目の……」と言いかけて、うまく伝わらないと、「駿河台道灌道の……」と言い直す。いつのまにか、通り名に親しみを感じ、そこで働く人たちとの間に一体感も生まれる。

温泉地で有名な大分県由布院では、22年度から「ゆふいん通り名プロジェクト」が始まった。

由布院は、由布岳の麓の盆地にひろがるのどかな農村で、一見すると温泉地に見えないが、長年にわたって自然の景観を大切にし、女性を中心に人気がある。おしゃれなお店も増え、今では300店舗が立地している。

JR由布駅前のメインストリートに立つと、「Ａ＃１ 駅前通り」の看板が目に飛び込んでくる。渋い白抜きの字が書かれたシンプルなデザインで、起点となっている駅から道をのぼると約10メートルおきに、看板やシールが貼られ、分かりやすく表示されている（写真参照）。

ほかにも、「花の木通り」「平成・御幸通り」「朝霧坂」「金鱗湖通り」など、200mから１㎞の距離の通りで、歩く人が見やすい看板の高さや向き、個人の塀に貼る許可をとるなど、一カ所ずつ丁寧に検討しながらプロジェクトが進められている。

通りの呼び名が一本の道で異なる場合は、「平成・御幸通り」のように、以前から使われていた名前を大切にし、両方を残している。アルファベットの表記も行い、外国人観光客には「Ａライン」とすると分かりやすい。

よく交差点には、施設名表示の板がツリーのように連なるポールが建っているが、施設名が多くなると見づらく更新も必要となる。由布院では道案内は公共のものだけと紳士協定がある一方で、野立て看板の増加が景観上の問題になっている。

その点、「通り名や起点からの番号を記した看板」と「地図」を組み合わせれば、１枚の紙の地図を持つだけで自分の居場所を簡単に確認でき、人にも伝えやすくなる。田んぼ道のはずれにあるおしゃれなカフェをめざし、銀行やコンビニといった目印がなくても難なく行くことができる。

最近は、GPS付スマートフォーンのITマップを利用する人が増えている。しかし、くるくると飛び込む情報に目を奪われ画面に集中するあまり、道の真ん中に立ち止まってしまっては、道端に咲く草木を眺めることも、ゆったりした気分でおいしい空気を満喫することもできない。車道と歩道の区分がない道では車の接近に気づかず危険である。

由布院温泉観光協会理事で、ゆふいん通り名プロジェクト座長の靏野和明氏は、「景観や安全を大切に考えて、由布院を十分に楽しんでもらえるようにしたい」と思いを語った。

親しみのある「通り名」の道は、はるか地域の未来につづいていく。

ゆふいん「通り名」プロジェクト

（2011年10月現在）

＊通り名は順次増える予定。

全国の有名な「通り名」

東　京	内堀通、外堀通、明治通、山手通、浅草通、桜田通、目黒通、青山通、玉川通、新宿通、靖国通
大　阪	御堂筋、新なにわ筋、淀川通、姫島通
名古屋	広小路通、伏見通、桜通、太閤通
京　都	五条通、北大路通、西五条通、烏丸通

日経研前の駿河台道灌道